

影印・翻刻 『堅田記』

早稲田大学近世貴重本研究會

雲 英 末
伊 藤 善 隆
二 又 淳

〈解題〉

はじめに

『堅田記』は、山岡元隣（一六三一～一六七二）が、寛文九年（二六六九）四月二十一日、堅田の竹内成秀の招きによって、一如・正房・元恕らとともに京都から堅田に赴き、日吉神社の祭礼山王祭を見物し、堅田の俳人たちと交流した折の二泊三日の行実を述べた文章で、成秀に呈上する形式を取っている。その内容と元隣自筆資料としての重要性に鑑み、ここに解題を加え、影印・翻刻することとした。

一 書誌

書名…『堅田記』（へ五―六六七六）

書型…卷子本一卷。

紙高…二九・九糎。

長さ…二一九・〇糎。

料紙…水辺柳模様雲母摺金泥下絵布目料紙。

題簽…「堅田記 円明院 両筆」（本文と別筆、墨書）。

内題…「堅田記」（円明院一如筆）。

本文…山岡元隣筆。

奥書…成秀雅丈 机下 元隣（朱印「而愠」）。

成立…本文冒頭に「寛文九年卯月廿一日……」とあり、四

図版1 「聞たさや飛たつ計時鳥 元隣」(伊藤善隆蔵)



一如や正房も発句を詠む。夏の月見をしたかったが、夜が更けたので控える。

・四月二十二日

近江の鮒の膾、鯉の羹、鱒などで饗応してくれる。竹内家の富栄え、里人からも尊敬されている様子を述べ、また邸内に見事な古松のあることに触れている。

船に乗る。みごとな楼船で、堅田の浦づたいに進む。若宮の前で遙拝、七本柳という港で下船。大宮をはじめ七つの御社を拝し、酒など飲んだりして発句を作る。ここで初めて成秀に對面する。成秀は夜宮に参拝するため、前日よりここに来ていたのである。

馬場の棧敷で山王祭の様子を見物。ついで七本柳の港にもどり、船に乗り、神輿が船で唐崎沖へ渡御するのを見送り、その還御を待つ。その間、この祭を時鳥の祭というのだが、その謂れを聞いて記す。神輿還御、若宮へ着御。

堅田の成秀の屋敷へ戻る。堅田の浮御堂の暮の念仏に耳を傾け、ついでそこに詣でる。また、成秀の屋敷に戻り、正利・正次・観江・河童・政盛・重氏など、堅田の俳人たちが集まり、連句を完成させる。また、浮御堂の午夜の鐘を、心を澄ませて

月の堅田行のあと、しばらくして染筆したものと考えられる。また巻末に「成秀雅丈 机下」とあり、堅田で接待を受けた成秀に贈呈したものであることが分かる。

備考：本文の筆跡は山岡元隣のものであり、巻末に捺す印の「而愠」とは元隣の齋号(而愠齋)である。参考までに元隣の短冊を示しておく(図版1)。

二 堅田行の概容

まず、『堅田記』に記された三日間の行実を要約してみよう。
・四月二十一日

京都を出発して夕刻堅田の成秀邸へ着く。成秀の父君に對面。元隣をはじめ、京都からの同行の人々は、一如・正房・元恕。元隣は所望されて発句を詠むと、接待側の如雲が脇を付ける。

聴く。

・四月二十三日

早々に帰ろうとするのを引き留められる。成秀邸の座敷のしつらいに感心し、琵琶湖の眺望に感嘆する。なお、堅田の成秀との機縁を作ってくれた伊安が参加できなかったのを残念がる。その後、元隣は発句を詠んだり、地元の如雲の送別吟を受けたりする。ついで、堅田から唐崎へ行き、唐崎大明神に詣で、そこから船で申の上刻大津に着く。大津から各自京の家に帰り着いた。

三 日吉山王祭

つぎに、元隣たちが見物した日吉山王祭についてその概容を確認しておきたい。山王祭は三月十三日から四月中の申の日を中心に一ヶ月半にわたる日吉大社を中心とする祭である。とくに、四月の中の申の日を中心とした午から酉の日までの四日間がクライマックスとなる。元隣たちが行った寛文九年四月二十一日は未、二十一日は申、二十三日は酉の日にあたっている(湯浅吉美編『日本暦日便覧 下』汲古書院、昭和六十三年)。

この祭のもっとも基本的な文献は『神道大系神社編二十九

影印・翻刻『堅田記』

日吉』(同編纂会編、昭和五十八年)所収の『日吉山王祭礼新記』(貞享五年)、『日吉御祭礼之次第』(天保八年)、『粟津御供本調進細記』(弘化三年)などであるが、他にも通俗書として『東海道名所図会』(寛政九年)、『伊勢参宮名所図会』(同年)、『近江名所図会』(文化十一年)などがあり、とくに名所図会の三書は挿絵入りで詳細に記述している。あまりに詳細なので引用は差し控えるが、『国史大辞典』の「日吉山王祭」の項目(岡田精司執筆)が簡潔で要領を得ているので、それを引用させていただく。

まず午の日夕刻から午の神事がある。東本宮とその妃神の樹下神社の荒御魂を祭る背後の八王子山山上の社殿から、甲冑姿の武者に警護された神輿二基を荒々しく下ろし、麓の二宮拝殿に安置し、闇の中で神事がある。翌未の日には、境外の大政所(お旅所)に二宮系の四社の神輿を並べ、献茶祭のあと京都下京の南山王社より献上の御供(この中に幼児の玩具が数点ある)を神輿に供える(未の御供)。その日の夕方から大政所で宵宮落し(よみやおとし)があり、神輿を荒々しく振ったのち、大宮(西本宮)拝殿に移す。次の申の日は祭の中心で、主に大宮の行事がある。数日前

に大津の四宮神社に運び入れてあった大櫓（おおさかき）の行列渡御や、鎧姿の幼児たちによる花渡りもある。大宮の神前においては大祭が行われ、桂の奉幣や天台座主の五色の奉幣がある。この日午後には、七社の神輿が湖上に出て船渡御（ふなとぎよ）があり、この時唐崎の沖で膳所（ぜぜ）地区より献上の粟津（あわづ）の御供四十九膳が供えられて湖水に投ぜられる。西の日に大宮神前で西の神事があつて祭を終える。

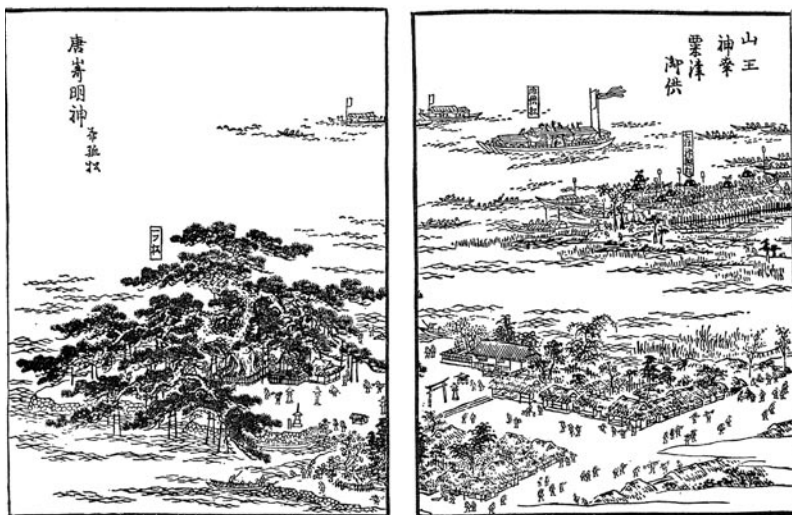
ついでながら、堅田の浮御堂については『東海道名所図会』の記述を引用させていただく。

浮御堂（志賀郡堅田にあり。宗旨禪宗、海門山満月寺と号す。京都紫野大徳寺に属す）
 本尊阿弥陀仏（左右に化仏一千体を安ず、ともに恵心僧都の作）

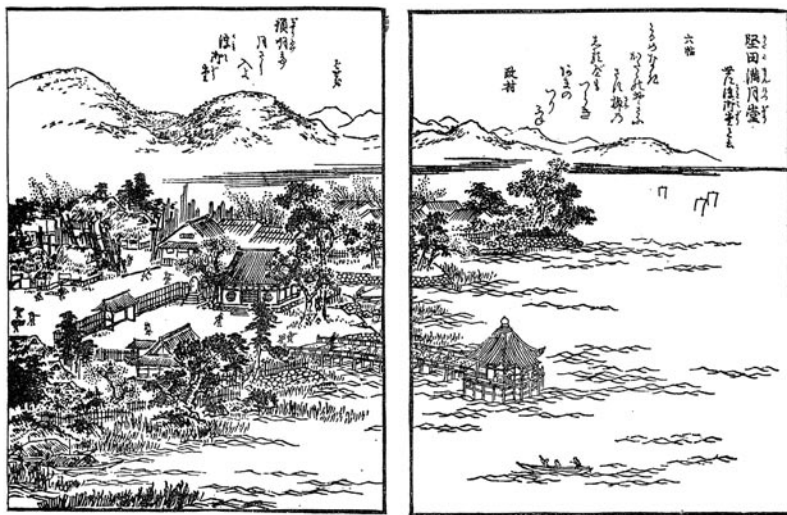
観音堂（聖徳太子御作の観音を安ず。また伝教大師の作の薬師仏、弘法大師の作の石地藏等を安ず。当寺初めは、一条院御宇、横川の源信僧都の開基、藁葺の草堂にて岸より橋がかりありて、湖上に御堂を創す。伝に云、むかし源信僧都横川の山岳より湖上を眺給ふに、夜々光明赫々たり。



図版2 「七本柳海岸に七社の神輿御船沖に漕出唐崎に向ふ」（『伊勢参宮名所図会』）



図版3 「山王神幸 粟津御供 唐崎明神并孤松」(『伊勢参宮名所図会』)



図版4 「堅田満月堂 世に浮御堂と云」(『伊勢参宮名所図会』)

この浦に来り漁者の網をおろすに、黄金一寸八歩の弥陀の像を得たり。この浦古来より漁人多し。その鱗殺生供養の爲に、黄金仏腹内に籠めて本尊並びに一千体を安ず。今時より五十年前、御堂類火に及ぶ。桜町院詔を下して、御能舞台御寄附によつて、今の御堂を再興に及ぶ。また其残木をもつて客殿をいとむ。七月十五日より三日の間法会あり、近郷群参す)

なお、参考として祭の様子を描いた挿絵(図版2・図版3)と浮御堂を描いた挿絵(図版4)を示しておく(図版は、鈴木棠三編集『日本名所風俗図会』十二(角川書店、昭和六十年)による)。

四 登場する俳人たち

つぎに、この元隣の堅田行に関わつた俳人たちについて、その概略を記しておきたい。

まず、元隣を招いた成秀であるが、竹内茂兵衛成秀と称し、堅田の人で生没年は未詳である。元隣が成秀邸を訪れたのは、寛文九年(一六六九)だが、じつはこの二十二年後の元禄四年(一六九二)八月十五日には、芭蕉が同邸を訪れている。そして、

元隣がこの『堅田記』の中で「かたへの砌にふりたる松有」と述べている同じ松を見て、芭蕉は「成秀庭上松を誉ること葉」(『堅田集』)と題した俳文を草している。その翌日には「堅田十六夜之弁」(『芭蕉庵小文庫』)の俳文もあり、また芭蕉の発句「安々と出ていざよふ月の雲」に、脇を成秀が「舟をならべて置わたす露」と付けて、歌仙一卷を興行している。連衆の中には、元隣の『堅田記』に登場する重氏の名も見える。成秀は堅田の名士として、寛文九年に元隣、元禄四年には芭蕉と交流したのであろう。なお、元隣の『宝蔵』(寛文十一年)の「追加発句」に、成秀は「堅田竹内成秀」として「ふみ月や見ぬ世の人を玉まつり」など、四句が入集する。重氏も同集に「江州森重氏」として「みづうみのそにしきたり紅葉鮎」の一句が入集している。

やはり堅田の俳人として登場するのは如雲・正利・正次・観江・河蜜・政盛・正成らであるが、このうち、『宝蔵』の「追加発句」には如雲・正次の発句が、「一もとはきく酒つくるもたいかな 堅田如雲」、「やなぎ髪ふきすく風やけづりぐし 形知正次」と各一句ずつ入集する。

いっぽう、「都方よりのまろうどは、みの、一如叟」として

登場する一如は、美濃加納の法印円明院一如のことである。生

没年は未詳。一如は、元隣と親しい交遊関係があり、寛文元年『季吟日記』の十月十四日に、「みの、くに円明院法印のほりきたれり。元隣いざないたり」とあり、また同日記の十月二十九日にも、元隣宅で円明院が俳諧興行を行い、季吟も一座したことが記録されている。さらに、元隣の『身の楽千句』（寛文二年）の最後の百韻は「霜月ついたちみの、円明院主と此所にいたり」と前書きする発句「けふくるや一やう生の有馬の湯シヨクアリマ ユ 元隣」に始まるが、これは有馬温泉で円明院一如と興行した両吟百韻である。その他、元隣の『諸国独吟集』（寛文十二年）には、「和ものも闡てはこはし鬼筋 美濃加納一如」の発句で、百韻一卷が入集する。また、延宝四年（一六七六）の胡兮編『到来集』には、発句三、付句一が入集する。

なお、一如は寛文九年四月に元隣の『補鉄槌』（徒然草増補鉄槌）に跋文を寄せている。美濃の一如が跋文を京まで持参したか、あるいは送付の後、一如自身も上京し、ついで堅田の成秀邸へ同行したものと思われる。

一如と同じく京都から同行したのは正房であるが、この人物も『宝蔵』に発句「はな一本千本の中のがめかな 樋口正房」

影印・翻刻『堅田記』

他一句が入集している。

また、元隣と成秀との仲介の労をとった伊安は京の人で、『宝蔵』に「梅が香よめくらは垣をのぞき鼻神原伊安 以下十七句が入集し、『諸国独吟集』にも「花に鼻のごとくならしめよ風の口神原伊安」を発句とする百韻一卷が入集する。詳しい経歴は未詳ながら、元隣ときわめて親しかった俳人であることが想像できよう。

なお、元想は『堅田記』の作者元隣の息子である。そこで、最後に、元隣と元想の略歴について述べておきたい。

五 元隣・元想略歴

元隣は、寛永八年（一六三二）生。寛文十二年閏六月二十七日没。四十二歳。辞世吟「風も水もなうて涼しき夕かな」（『諸国独吟集』）。山岡氏。字は徳甫。別号、而愠斎・洛陽山人・抱甕斎、医名は玄水。伊勢山田の商家の出身であったが、幼児より病弱のため、家業を廃して上京、季吟について俳諧・国学を学んだ。また儒学・禅学にも通じ、後年には春庵（岡本玄治の高弟）について医学も修めたという。

仮名草子作者として教訓的随想集『他我身之上』（明暦三年

刊)や『小さかづき』(寛文十二年刊)があり、俳諧関係では十百韻をあつめた『身の楽千句』(寛文二年)、初心者向けのすぐれた作法書『誹諧小式』(寛文二年)、季吟・宗因ら数名の歌仙を集めた『歌仙ぞろへ』(寛文六年)、俳文集の嚆矢として重要な『宝蔵』(寛文十一年)、また知友門弟の独吟を集めた『諸国独吟集』(寛文十二年)などがある。いっぽう、古典注釈には『徒然草鉄槌増補』『徒然草別伝』『書鴨長明方丈記』『水鏡抄』『世の中百首註』『増補食物和哥本草』など、多数の著書がある。

元隣の発句を示しておこう。「花さかぬ身はなくばかり犬ざくら」(『身の楽千句』)、「せみのこゑもゆふだつあとや晴の歌」、「三夕ももとやひとつのけさの秋」、「名にしおはゞさむさをよきよ衾雪」(以上『新統犬筑波集』)。

つぎに、元想について述べてみる。元想は『歳旦発句集』の寛文九年・同十一年・同十二年・延宝元年・同二年に歳旦句が入集。他に『統山井』(湖春編、寛文七年)、『新百人一句』(重以編、寛文十一年)、『宝蔵』(元隣編、寛文十一年)に入集する。寛文十二年閏六月二十七日に父元隣が四十二歳で没すると、編集途中であった『諸国独吟集』の草稿を引き継いで整理し、同年十二月の季吟序、元想跋を付して刊行している。元想の年齢

ははっきりしないが、当時成年には達していたと思われる。その後、元想は『後撰犬筑波集』(蘭秀編、延宝二年)、『統連珠』(季吟編、延宝四年)、『越路草』(卜琴編、延宝五年)等に入集。編著に『はいかい続仕様』(延宝六年、未見)がある。また、元隣の遺稿『古今百物語評判』を貞享三年(一六八六)に補訂して刊行しているが、以後の動静は未詳である。

最後に、元想の発句を示しておこう。「元隣千句の後万句催しければ／月弓も後ばりなれや三ヶの月」(『統山井』)、「勝負みむおそかれとかれ競馬」(『新百人一句』)、「長いきはうそにしてくめきくの酒」(『後撰犬筑波集』)、「我日々にみつながらみん雪月花」(『統連珠』)。なお元隣に関しては、雲英末雄編「山岡元隣篇」(『貞門談林諸家句集』笠間書院、昭和四十六年)を参照されたい。

おわりに

以上、『堅田記』の内容と日吉山王祭、それに作者元隣をはじめとする堅田行に関わった俳人たちについて、その概略を記した。本書は、近世初期における山王祭の記録として、また俳文集の嚆矢『宝蔵』を編んだ元隣の自筆俳文資料として、さら

には成秀をはじめとする近江堅田俳壇の資料として、短いながらも重要な意味を持った作品であるといえよう。

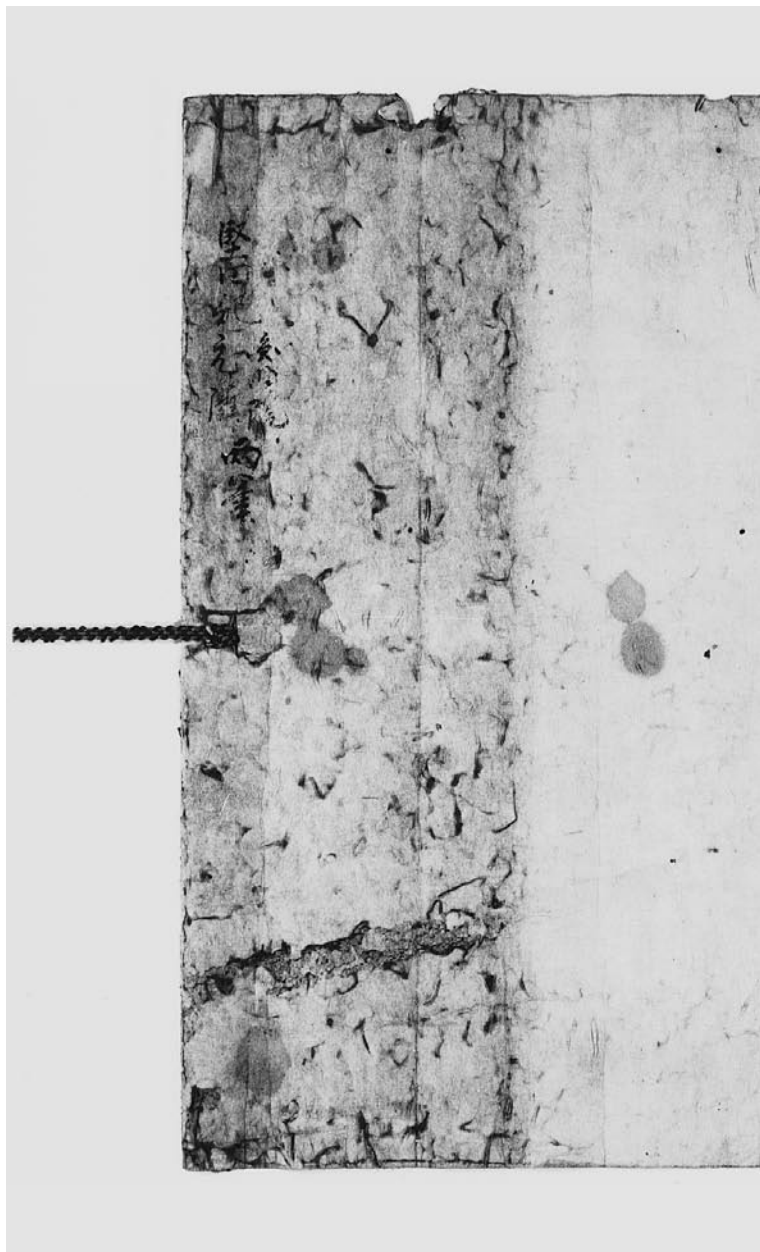
付記

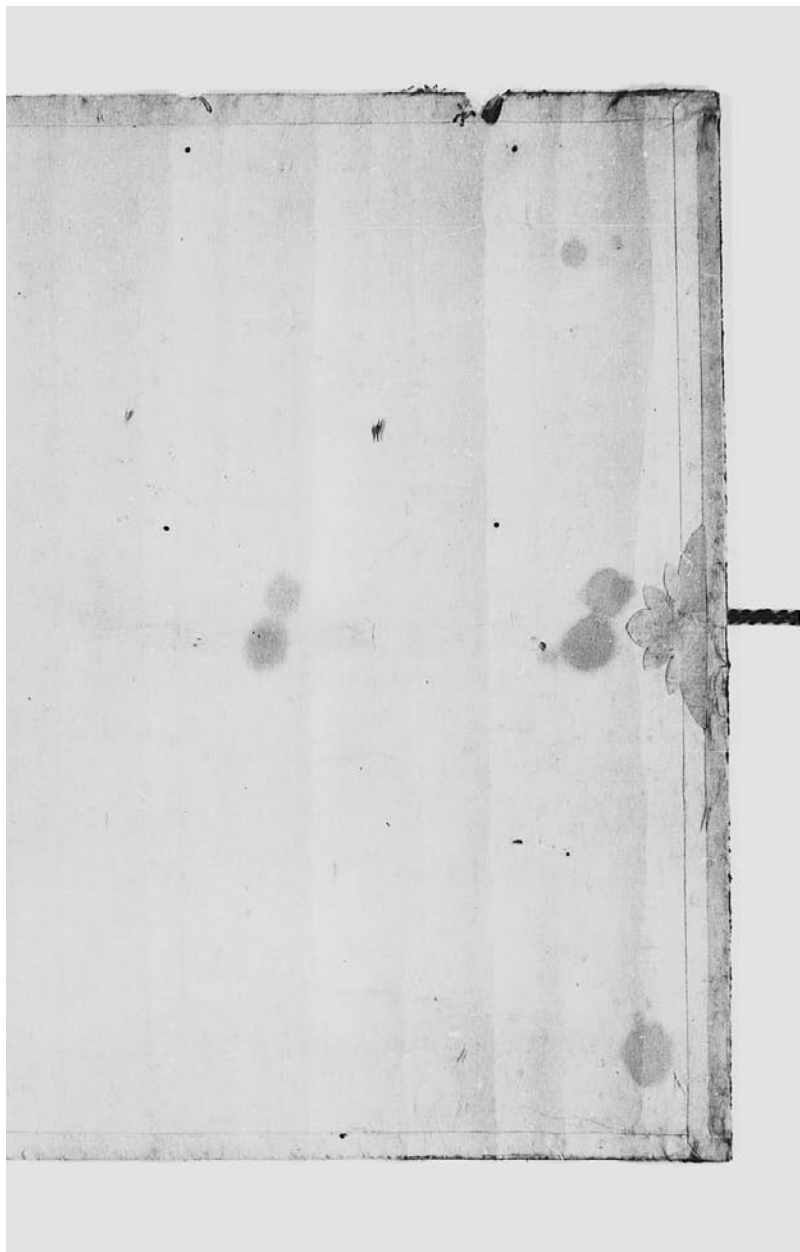
本稿を成すにあたり、MIHO MUSEUM 学芸員岡田秀之氏、日吉大社社務所より御教示を得た。記して御礼申し上げます。

(きら すえお 文学学術院教授)

(いとう よしたか 湘北短期大学専任講師)

(ふたまた じゅん 明治大学非常勤講師)





とて人の名もなき所なれば
七ヶ早のあつた申は
ていつた名はやと事何んと都乃音は
形を身はれたる身より江南野水碧於天中を白鴉
困似衆といふるを各さし
形と漕はて纏をこけり
けあせし徳あること
清よりあつた
社あるは
はくは何を祈の
て各をいのち
其二カも
形を書をいのち
昔れ大なる
時をこころ
くも

けつちん げんしん しょうりやう ぎんしん せうじゆ
おまをい願秀う ぎんしん せうじゆ げんしん
けつちん げんしん しょうりやう ぎんしん
せうじゆ げんしん しょうりやう ぎんしん
の目くわいばんしん しょうりやう ぎんしん

とりのちん せうじゆ ぎんしん しょうりやう

けつちん げんしん しょうりやう ぎんしん
せうじゆ げんしん しょうりやう ぎんしん
の目くわいばんしん しょうりやう ぎんしん

ていしん げんしん しょうりやう ぎんしん
せうじゆ げんしん しょうりやう ぎんしん
の目くわいばんしん しょうりやう ぎんしん

と山と雲のいぢりて言ふは雲を舟と神輿の舟と
七本柳よりつとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
又舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と

舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と

舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と

舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と
舟は心につとまはしつる舟と神輿の舟と

晴下して花はよそよそと人なきに
と波はよそよそと人なきに
浮城寺の昔の合佛のつらき
くく信てなきは信の堂とつら
その像を剣に経りて又所
今の世にわが世の望南千
夜もさしとささるるはつら
山田大橋をさしとささるる
らまはるるはつら
多きとささるるはつら
あつらとささるるはつら
しつらとささるるはつら
法華はつらとささるるはつら
天八又とささるるはつら
法師の誠をささるるはつら
たつらとささるるはつら
あつらとささるるはつら
あつらとささるるはつら
あつらとささるるはつら
あつらとささるるはつら

又云これこそ所乃をもきく正利正次觀江河雲收盛
宣氏形とほといふ事終りし彼は福をきき申す
を首尾せしめ終りしとれいふ事あれたるは堂の
手紙の縁を彼の書ふち特くいふ事あり申す
はるるくこと地はちのくくあはれいふ事と極
くこの賦いふ事今もあはれいふ事と極
はるるくこと地はちのくくあはれいふ事と極
くこの賦いふ事今もあはれいふ事と極

本一七
 ちやや 地味或る之は湖の魚を也を我行し 其浦やま
 形我し ちやや母の形ありき ちやや 個多き也 ちやや ちやや
 し ちやや ちやや ちやや 誘云一宿如全之宿 形能之宿
 え ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ひちや ちやや ちやや ちやや 伊每書生け多しのちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 と 誘い ちやや ちやや ちやや ちやや

ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや

形と ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや

ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや
 ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや ちやや

今...
 長...
 諸...
 善...
 中...
 終...
 終...



國秀雅人



〔翻刻〕

〔表紙〕

堅田記

円明院
元隣両筆

〔本文〕

堅田記

寛文九年卯月廿一日未の日、竹内成秀雅丈の招により、九重を出、夕の空に堅田に至て、あないせさせていりぬ。成秀のち、ぎみにたいめして、をちこちの浦山の気色などうかたまはるより、逍遙せまほしけれど、宵やみの道、たどくしき折からなれば、しばしやすらへるに、東の方にさし出る月も、山遠く水広くして、都の空よりは、実はやき心ちせられけるに、あるじ方よりの所望に

夏の月景一面や琵琶のうみ

元隣

あるじかたより

波のつたへの調子すゞしき

如雲

などつらねて、満座をのく興に入り。都方よりのまろうどは、みの、一如叟、正房の主、元恕等也。宿の栄を

ことぶきて

ねざしよく子にこや添る竹のうち

一如

元隣にさそはれけるこゝろを

舟まつりをしかけて来るや帆かの客

正房

猶、月は明るまでも見まほしけれど、夜もいたく更ければ、をのくしづまりけらし。

あくれば廿二日申の日、まめやかにかたらへるにも、かく一夜宿りし情に千年もむつびし心ちせられけむ。宿世のほどもゆかしく思ひめぐらせるに、朝もよひきらくしきあるじまうけに、松江の鱸はさるものにて、名にしあふみの鮓の膾、鯉のあつもの、くひたる日は鬢そ、げずなどいへるに、また鱒といへる魚は、むかしく櫛の化したるものにて、文字にも其かたへになんしたがへりなど、ふるき書にも侍れば、取あつめて、若衆といはれし昔も取かへさまほしく、中々もの心ほそきたねともなりけらし。此あるじこそ、そのかみより 公方にもしろしめさる、筋有て、家には陶朱公の富をかさね、庭には扁舟あまたつなぎをき、猶湖の浦波に難波津のふかき流

をくみそへ、ひえの嶽の高き月を鷲の御山のたうときか
げと仰て、外には武道をはげむといへども、内にはそこ
はこの慈悲有て、其蔭にかくる、里人いとおをし。いづ
れをかたらずとせん。又かたへの砌にふりたる松有。帆
柱の立のぼりたるしん、艫綱のひかえ、釣するあまのう
けたる枝、さゝ浪のはるかにながしたる梢など、万の木
草をひとつ瓶にさしてつくるひ立んもやはかところ、誠
に他事なき見ものにぞ。

ほと、ぎすまつに及ばぬ遊山哉

元隣

舟人、日もたけぬ、はや舟にのれ、とそ、のかせば、汀
の方に趣るに、楼船いみじく粧たて、下に双べるた、み
は、青海と色を争ひ、上に敷たる毛氈は、照日と映じあ
ひて、其興いはんも更也。堅田の浦の浦づたひに、沖の
方を見めぐらせば、はしと足とのあかのひる中にねぶれ
る鳥有。よびをこしてもありやなしやと事問んも、都の
方におもふ人もなき身なれば、たゞかの、江南野水碧
於天、中在白鷗閑似我、といへるをぞ、すじかへし侍る
ほどに、へいづちななども漕過て、纓をもあらひつべき水

イひえつじ

影印・翻刻『堅田記』

結て、若宮の御前にて遥拝せるも、心すゞし。七本柳と
かやいへる湊より、かちよりまうで、大宮を始め奉り、
七の御社おがめるも、いと有難き。おほくの人のむらが
りて、ぬかづくも、何をか祈り、いづれをかおもふらん。
あるひは、位を祈り、名をいのり、身をいのり、富をぞ
いのるべかりける。其二のまちなるよりも、法師なるは
児をいのり、俗なるは妻をいのらん。むもれ木こそ立聞
もせまほしけれ。大みやの神杉ものふりて、はしとの、
水の流こそ、時をもわかずめでたけれ。かたへの昔の筵
に、酒たうべ、くだものすゝめて、人々発句などつくれ
り。

つくりそえくむさかもとの祭哉

正房

折しも成秀に逢奉れり。かく遅くたいめせる事は此ほど
罷くべき由契けれど、又障る事有、えまうで来まじきと
なんいひをこせければ、成秀は、夜宮拜みに、さきの日
より、此所にわたり給へる也。扱、彼一女つむぎ叟の
ねざしよく子に添る竹のうち
といへるをかたり出ければ

いつもなつきてうれ子規の声

成秀

とらぬ氣をしりて燕や宿るらん

元隣

などつらねて、馬場に至て棧敷に双居て、祭まつほど、いとらうがはし。氏人の長さ三丈ばかりなる櫛ひきゐて来るを

大木は儀勢でもつたさか木かな

元隣

宮所へのぼる法師ばらの、たけき粧は、さはらばひやす山王祭、いひ出んも言の葉ばやき有様也。それより又七本柳に下り、有つる舟に打のり、神輿の出御を待程、心あはたゞし。沖にはあまた舟どもかざりたて、又なく晴がまし。神輿、めでたくうつらせ給ふを、人々待かね、をし出せる舟くらべの勢、天が下にまた有べきわざともおもほえず。

まつりには景を殊勝やうみの面

元恕

神輿は、唐崎の方へとぶがごとくならせ給へるを、見送り奉りて、還御までるほど、或人の語られけるは、此祭を時鳥の祭といへるは、必此鳥来鳴とかや。そのかみ、故有て長月に有し事侍つるに、雲埋老樹空山裏より、不

思義に一声音づれけるを、ある歌人、もれてうらみむ神もこそあれ、と口ずさみけるに、つゞきて六声鳴侍し、などいへりければ

ほと、ぎす付声せよや堅田ぶし

一如

扱、神輿還御ならせ給て、若宮殿へ着御ならせ給へば、暇申て帰らんといへりけるを、しゐてとゞめ給へば、是非も波路に漕もどされて、又堅田の屋敷にのぼり侍ぬ。浮御堂の暮の念仏、ほの聞ゆるも哀を催されて、人々詣でにき。抑、此浮御堂といへるは、恵心の僧都、ちの尊像を刻み給ひて此所に沈め給ふ。その余波とかや、今の世にあがめ奉る堅田千体、是なりとぞ。此御堂に、夜もすがらともせる御あかしをぞ、今津、かい津、つるがに渡り、山田矢橋をこぐ舟も、月なき比のより所とはしけるよし、あまの子のかたれるにぞ。無明の闇に迷ひて、生死の海にたゞよへる衆生の御仏の恵、日ひとつを頼む身の、猶おろそかにせる事など思ひ合せ侍れば、声たてぬ念仏もむねにせかれ、涙落すしもあらねど、かく抹香くさく法げつきても、われ鐘のとてもならざる菩提心じ

や。天八又発すべき行きさきの月日もこそあれど、兼好法師の誠を忘れて、たゞ風雲の思ひにのみ心まじはりて、松に及ばぬといひし時鳥のおもはくも侍れば

鳥もなけ御堂も本尊かけ作り

元隣

夏の景ことに心やうき御堂

正房

又立かへれば、所のすき人、正利、正次、観江、河童、政盛、重氏、などつどひ来給ひて、彼つらねかけし巻々を首尾せしめ給へり。とのかたに立出れば、うき御堂の午夜のかねも彼の闇にうちそへて、心をすまし、耳をあはるくさぐさ也。御うちの人々のおもへらんほども恥かしく、盛久の切うたはざる身にもあらざれば、大かたの暇ごひは今夜ぞ申侍し。

礼や申つくしかたしの舟祭

元恕

あくれば廿三日酉の日、鷺たちにもせまほしく、はねつくろひせしか共、いでそよ加古謂にて、鷹の爪たてらるべきと侍るに、又をさえられつ。床には人丸の御影、和歌は覚恕親王の御筆とかや。いよのすだれのひま求てながめやれば、所がらをきの鳥、茸鳥、竹生鳥など隠れ行、

舟の幽なるも、いづれが明石、いづれがこゝなるや、紫式部も此湖の気色をぞ、あかしの浦にはなぞらえけむ。猶、あまたの調度共見しか共、くだくしければかきもらいつ。諺云、一宿如金、二宿猶銀、三宿はえしれぬ。かねて聞ふるれば、薄茶の袂をふりきり、にげて帰らんとするを、猶とゞめ給ふにも残多きは、此あるじと結ぶの神せし伊安書生、此たびの祭にもれ給ふぞ、かへすくゝなる。また、嘉例として、伊安など誘ひまいらん。

さかえをいのりて

二度三度後度も契るや神祭

元隣

さか木のかげはしげる年々

正成

新酒のしるしに杉葉ぶらさげて

元恕

など口づからにて立出けるを、人々浮御堂までをくり給へりき。送りの舟の纜ときて、さらばくくと云かはせる詞にまじえて

夏の夜の短い事よ余波出し

如雲

といひ入たまふに

今に限らずときくゝの鳥

元隣

とこたふるに遙に舟はをし出しける。もとより舟には、
案内者侍れば、彼すねもの、長沮、桀溺に津尋ねむいた
づきもなく、心のまゝの小歌ぶしにて、唐崎大明神にま
うで、松根によつて腰をかけ、しばらくやすらひて、ま
た船にとりのり、申の上刻に大津につき、此ほどの礼な
どつぶさに伝え聞えて、また日ののこりたるほどに、を
のく宿にはいり侍き

元隣「而愼」

成秀雅丈 机下